

# 児童の価格と利子の理解にみる 社会認識の発達

## Development of Societal Thinking in Understanding of Price and Interest in Schoolchildren

教育心理学教室 田丸敏高

Toshitaka Tamaru\*: Development of societal thinking in understanding of price and interest in schoolchildren. (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, <Education Science>, 1989,31-1)

### 問題と目的

子どもはものの価格をどのようにして理解するのであろうか。これは、お金をものの値段に応じて正しく支払えるとか、おつりの授受を正確に行えるとかとは、異なった問題である<sup>(1)</sup>。これは、認識、より限定的には社会認識の問題である。もちろん、ここでいう社会認識とは社会的認知(social cognition)とは異なり、社会現象を対象とした思考を指す<sup>(2)</sup>。しかし、子どもの前には社会現象が初めから社会現象として現れるわけではない。そこに、子どもが価格について思考しようとする際の困難が予想される。

ところで、これまでわれわれは、子どもが行う社会認識の困難についていくつかの指摘を行ってきた。たとえば、場面の制約による困難がある<sup>(3)</sup>。子どもでは、認識に際して特定の場面を越えて一般的に物事を表象することが難しい。したがって、ものの売買を通じてお金の流通などを思い浮かべることは難しい。あるいは、社会的な関係を個人的な関係から区別する困難がある<sup>(4)</sup>。子どもに直接示されているのは個人的な関係である。子どもは、バスの運転手にお金を払うのは、親切にしてもらった人に対するお礼と同様な関係においてとらえやすい。子どもには、法的関係や経済的關係は、独自の表象とはなっていない。

ところが、価格の認識に際しては、さらに新たな困難が加わることが予想される。それは、社会現象を自然現象から区別する困難である。価格は、直接的には、ものに応じてつけられている。スイカの価格が800円であることは、スイカが甘かったり大きかったりするのと同じように、ものとしてのスイカに直接結び付いた価値として子どもの前に現れている。しかし、価格は、社会現象として自然現象から区別されなければ理解されない。また、自然現象の理解に際しては物と物との関係を考慮すれば良いが、社会現象では人と人との関係を考慮しなければならなくなる。しかも、人と人との関係は、直接的には立ち現れておらず、物と物との関係の背後に潜んでいる。ものの価格の

---

\*Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University

違いを問題にするときには、大きさであろうと重さであろうと、はたまた2つの次元の関係であろうと、物的関係にこだわってはいは、いつまでたっても問題は解決されない。物と物との関係の背後に存在する人と人との関係に気づかない限り、問題は解決されない。子どもは、こうした問題を前にしてどのように振舞うのであろうか。子どもは、どのようにして困難を克服して、ものの価格を理解し、社会について思考できるようになるのであろうか。

さらに、こうした困難は、銀行業務を理解しようとしたとき倍加されると思われる<sup>(5)</sup>。銀行では、ものが直接売買されることはない。お金を預けると、それが増えて戻ってくる。利子がつくという現象は、子どもにとっては全くの謎である。謎の解決を迫られたとき、子どもはいったいどう推理しどう答えるのであろうか。ここにも子どもの社会認識の発達の姿が示されるであろう。

以上、本報告では、自然的関係と社会的関係との区別がいかに行われるかという観点から、子どもの価格理解の問題を取り上げてみる。子どもは、ものの価格に関する質問をされたとき、どのように思考し答えようとするのだろうか。そこに年齢の特徴がみられるのだろうか。社会認識特有の発達の困難が示されるのであろうか。また、農産物どうしの比較の場合と、農産物と工業製品との比較の場合、同じものの価格変動の場合で、異なる水準の説明が現れるのであろうか。さらに、そうした困難は利子の理解に際しても示されるのであろうか。今回は、山陰の商業地域の子どものたちとの対話資料に基づいて検討する<sup>(6)</sup>。

## 方 法

**被験児** 米子市A小学校2年生29人、4年生38人、6年生33人。

**調査日** 1988年12月

**場 所** A小学校教室

**手続き** 1人当たり20分から30分程度のインタビュー(23項目)を行う。インタビューの内容はカセットレコーダーに録音し、それを起こしたものを1次資料とした。

**質問項目** 今回の分析の対象は次の4つの項目である。

1. お店屋さんに行ったところ、バナナは1本30円、スイカは1個800円でした。どうしてバナナよりスイカの方が値段が高いのですか。
2. (絵を見せながら)出ている品物に値段をつけてください。どうして、ボールペンより腕時計の方が値段が高いのですか。どうして腕時計よりテレビの方が値段が高いのですか。
3. 去年はスイカが1個800円でした。今年は同じスイカが1個400円です。どうして今年去年より値段が安いのだと思いますか。
4. あなたは銀行に行ったことがありますか。銀行とは何をしますところですか。銀行はみんなから預ったお金をどうするのでしょうか。銀行にお金を預けると、返してもらったとき、預けたお金はどうなっていますか。増えていますか、減っていますか。銀行にお金を預けると利子がつきます。それはどうしてですか。

## 結果

## A. ものの価格

## 1. バナナとスイカ

2種類の農産物、バナナとスイカの価格の違いを説明する課題では、テープ起こしされた資料を見てみると、主として3種類の説明の仕方が現れていることがわかる。そこで、はじめに各質問項目ごとに典型的な対話事例を示してみよう。

## ①自然的説明

Y. R. (F) 8. 06<sup>(7)</sup>

お店屋さんに行ったらね、バナナは1本30円、スイカは1個800円でした。どうして、バナナよりスイカの方が、値段が高いと思う？——「スイカは、おっきいから。」——他は、あるかな？——「・・・わからない。」——他は、いい？——「うん。」

T. T. (M) 8. 02

お店屋さんに行ったときにね、バナナは1本30円、スイカは1個800円だったんだけど、どうして、バナナよりスイカの方が、値段が高いのかなあ。——「おおきいけえ。」——他にはある？——「おいしいけえ。」——おいしいけえ・・・——「バナナはすぐ腐るでしょう。スイカ、あんまり腐らんけんね（腐らないからね）。」

## ②混合的説明

H. N. (M) 10. 06

お店屋さんに行ったところ、バナナは1本30円だったの。スイカは1個800円だったの。どうして、バナナよりスイカの方が、値段が高いんだと思う？——「えーと、それはスイカはおっきいとか、それとかバナナの方が安売りをしていたとか、そういうことでお金の差があったんじゃないかなあと思う。」——大きい他に理由はあるかな？——「大きい他には、えーと、安売りをしていたとか、スイカのほうがすごいおいしいスイカだったとか、そういうことでお金が高いんじゃないかなあと思います。」——どんなふうがいいスイカだったと思う？——「例えばおいしいとか、夏だからのどが乾くし、水気があるとか、バナナはあんまし水気がないけど、スイカのほうは水気があってそれでおいしいとか、そういうことじゃないかと思います。」——他には、いいかな？——「他には、バナナが少なかったとか。」——あ、バナナが？——「ああ、うそ。スイカが少なかったとか。」——どうしてスイカが少ないと高くなるのかな？——「やっぱり、少ない場合だと、安売りしてしまうと、少ししかお金がもうからないから、だから店の人が高くしたりとか。」——そうだね。——「それからお金が、テレビでやってる円高とか。」——円高——「・・・とかドル安とか、いろいろあるけど意味がわからない。そういうので、高いとかそういうのがあるかも知れない。」——他はいい？——「他は、わかりません。」

M. T. (M) 12. 04

お店屋さんに行ったらね、バナナは1本30円で、スイカは1個800円だったんだって。——「はい。」——なんで、バナナよりスイカの方が、値段が高いのかな？——「んー、大きさが違うとか。」——それから？——「作る日数が違うとか、・・・んー・・・それから・・・1個30円で、800円でしょ？」——そう。——「で、大きさが違って・・・だから、手間が違ったり、農薬を使う数とかが違ったり・・・手間はもう言ったから・・・そんぐらいじゃないかな？」

## ③社会的説明

I. T. (F) 10. 03

お店屋さんに行ったらね、バナナは1本30円、スイカは1個800円でした。どうして、バナナよりスイカの方が、値段が高いのかなあ？——「えっと、バナナの方が量が少ないし、スイカとか、何ヵ月も何ヵ月も、1年かかることだってあるし、で、世話するのがスイカの方が大変だと思うから、で、バナナの方は水と肥料とかやればいいし、それにバナナの方はたくさん作れるし、1つの房に10本ぐらいついてるものもあるし、なんかいろいろ作れるから、それにスイカはあまりたくさん、1つの房にあまりたくさんできないし、ずっと大きくなるので、すごく世話が、バナナより、時間とか、選別がたくさんかかるから、スイカの方が、なんか、作るときに、水とかたくさんいるから、それでスイカの方が高いんだと思う。」

S. M. (M) 12. 07

お店屋さんに行ったら、バナナは1本30円、スイカは1個800円でした。どっちが高いのかな？——「スイカの方だと思います。」——どうしてね、バナナよりスイカの方が高いと思った？——「スイカの方が、生産するのが難しいからだと思います。」——うん、スイカ作るの見たことある？——「いや、ありません。」——バナナはどうして簡単だろう？——「簡単にいうか、えっと、バナナは束になってできるからだと思います。」——そうか。で、生産が難しいと、どうして値段が高いんだろう。——「えっとー、生産が難しいと、数もそれだけ多くできないから、高くなると思います。」

ここで言う自然的説明とは、価格を説明しようとするとき、ものの直接的・感覚的諸性質、すなわち、自然的諸性質に依拠して行うものをいう。また、混合的説明とは、価格を説明するとき、ものの自然的諸性質とともに、社会的関係も考慮しようとしているものである。さらに、社会的説明とは、価格を説明するとき、主としてものの背後にある社会的諸関係（労働・生産関係、需給関係など）によっているものである。こうした説明の仕方に応じて、学年別に分類して人数を示すと、

表1. バナナとスイカ

	社会的	混合的	自然的	その他
2年		1 (3)	26 (90)	2 (7)
4年	2 (5)	9 (24)	27 (71)	
6年	8 (24)	8 (24)	14 (42)	3 (9)

人  
(パーセント)

表1のようになる。2年生では、ほとんど(90パーセント)が自然的説明を行っているが、4年生では、9人(24パーセント)が混合的、27人(71パーセント)が自然的説明を行う。社会的説明は4年生でも出現するが、6年生で8人(24パーセント)となる。6年生では、混合的説明が8人(24パーセント)であり、これを社会的説明に加えると16人(48パーセント)となり、自然的説明14人(42パーセント)より多くなる。

## 2. ボールペンと腕時計とテレビ

3つ工業製品の価格を比べる課題でも3つの説明の仕方がみられた。以下その例を示す。

## ①自然的説明

Y. R. (F) 8. 06

これ・・・何を書いてあるか、わかるかな？——「(うなずく)」——では、値段をつけてくれるかな。・・・ボールペン・・・うん、50円。時計さん・・・1000円。テレビは？ 9900円だね。どうして、ボールペンより時計を高くつけたの。教えてくれるかな？——「時計の方がね、役に立つか

ら。」——うん。他には？——「時計はよく腕につける。……だけどボールペンは、あんまり使わないから。」——他には？——「ない。」——どうしてね、今度は、時計よりテレビの方を高くつけたのかな。教えてくれるかな？——「テレビの方が大きいし、時計はちっちゃいから。」——他は、あるかな？——「ない。」

T. T. (M) 8. 02

これ見て。何かわかる？——「これ？」——これに値段をつけてほしいの。これね、ボールペン。これは、時計。これは、テレビ。これは何円だと思いますか？——「これ、1000円。」——ちょっと自分で書いてみて。これは？——「時計？」——うん。——「時計は1万円。」——今度はテレビ。——「テレビ？」——うん。——「10万円。」——何でボールペンよりも時計の方を高くつけたのかなあ？——「ボールペンはすぐ芯がなくなるでしょう。時計は何回も使えるけえ。」——他には？——「……他には、時間がわかるでしょう。」——うん。——「ボールペンは、時間がわかんない。」——時計とテレビ比べたら、何でテレビの方が高いのかなあ。——「……見えるけん(から)。テレビスタジオとか。」——他には？——「他には……俳優さんとか見えるけえ(から)。」——他にあるかなあ？——「他には……ニュースとかわかる。」——……遠くのことでもわかる、うん。他にはありますか？——「ない。」

## ②混合的説明

H. N. (M) 10. 06

これ、何の絵かわかるかな？——「はい。時計とテレビとボールペン。」——値段をね、思った通りにつけてみて、好きなように。——「はい。」——ボールペンさん、50円。時計は……——「これは別に、どんなのでもいい？」——うん。——「高いのでいきます。1万円もするやつがある。」——時計、1万円だね。——「1万円もするやつがあると思う。テレビは、えーと、このぐらいはするんじゃないかな。」——10万円。——「はい。」——どうしてボールペンより時計のほうを高くつけたのか、説明してくれる？——「えーと、やっぱりそのメーカーが有名とか、性能がいいとか、時計のほうが高いんじゃないかなと思います。」——そのほかには、あるかな？——「そのほかには、たとえばこのベルトのところ、なんか、ワニの皮とか、すごい高いもので作ってあるとか、そういうので高いんじゃないかなと思う。で、それで、時計の方を高くしました。」——他は、いい？——「他は、わかりません。」——何でテレビの方を時計より高くしたのか、教えてくれる？——「えーと、それはやっぱり、時計よりテレビの方が、いろんな機械をつめて、そういうのの代金が高くて高くしたとか、それとか、買ったよりもなんかもう少し高くして、お金をもうけようと思って少し高くしたとか、そういうことで高くなったと思います。」——他は、いいかな？——「他は、わかりません。」

I. T. (F) 10. 03

これ、なんかわかるかな。——「ボールペン。」——うん。——「時計、テレビ。」——これにね、値段をつけてほしいんだけど。——「え、ボールペンは、100円は高いから90円ぐらいで、えっと、テレビは何万円もするから、電気屋さんとかに行くと、そんなときは10万円とか高い値段するから。時計はお父さんとかに誕生日に買ってもらうし、1000円もかからないで子供のは買えるっていうから、500円ぐらいとか、安いときは500円で高いときは……」——どれぐらいかにしてくれる？——「えっと、800円ぐらい。テレビは、うーんと、10万円ぐらい。」——ボールペンと時計比べたときにね、時計の方が高くなってね。これは、どうして？——「ボールペンより時計の方が、なんか機械がいっぱい入ってるし、それにこまごましているし、ボールペンだったら機械でなんか形や

って、インクつめるとかも機械とかがやってくれると思うし、で、時計は自分っていうか、人間の手で、こまい（細かい）ところとかもネジでしめたりしないといけないし、それにボールペンより時計の方が、なんか重たいし、なんか機械がいっぱいつまってるし、それだけ機械の値段とかで、いろいろと、すごく高くなってるんだと思います。」——時計とテレビね、今度はテレビの方が高い。これはどうして？——「それは、ガラスとか機械とかが時計よりも時計の何十倍もたくさん入ってるし、それからチャンネルとかもきちんと合わせて、なんかテレビできちんと映るようにしないとイケないし、それからアンテナできちんと通じるようにしていないとイケないし、チャンネルとかもちゃんと決めて、このチャンネルはこんな番組とか決めてないといけないから。それにテレビの方が重たいし、大きいし、そんなこまごましてないけど、細かい機械がいっぱい要るから、今度はテレビの方が高くなっているんだと思います。」

### ③社会的説明

S. M. (M) 12. 07

ここにね、いろんな品物があるんだ。値段をつけてください、思った通りでいいからな。——「えーっ。(記入する)」——ボールペンはいくらするって？——「100円です。」——腕時計は？——「5000円です。」——テレビは？——「2万円です。」——どれが一番高い？——「テレビ。」——何でテレビは腕時計より値段が高いんだろう？——「えっとー、腕時計は部品が少ないけど、テレビの方は部品が大量に必要なだからだと思います。」——部品が大量に必要なだと、どうして値段が高いんだろう？——「えっとー、部品の一つ一つが、1円だと考えると、やっぱりテレビの方が高くなるからだと思います。」——そうか。腕時計が5000円でボールペンが100円だな。ずいぶん値段が違うな。どうしてボールペンより腕時計が高いだろう？——「えっと、ボールペンは作るのが簡単だし、そんなに部品が必要ではないけど、それに比べて腕時計は、部品も多く必要だし、作るのも大変だからだと思います。」

M. T. (M) 12. 04

ここに、ボールペンと腕時計とテレビがあるんだけど、これに値段をつけてみてくれるかな。——「(記入する) 値段ねえ。」——ボールペンが100円で、腕時計が1万円で、テレビが20万円。そうか。何でボールペンよりも腕時計の方が高いのかな？——「だって、この腕時計は、なんか高そうな、普通に売ってるちゃちなやつには見えんけーね。で、1万円ぐらいがいいんじゃないかと思ったの。」——どうしてボールペンって安いのかな？——「ボールペンはなんかそこらへんでいつでも100円で売るとし、だし、あんまり作るのに手間がかからんのじゃないか、精密なものじゃないし。」——腕時計よりテレビの方が高いけど、それはどうしてかな？——「うちのテレビはだいたいそんなくらいだし、んー、だし、おっきーテレビと思うから、そんな材料がたくさん要ったりして、それで20万ぐらい。」——他には、どう？——「んー、手間がかかるし、作るのに、それだし工場が電気屋さんへ運ぶ輸送料っていうのも、たぶん違うと思うし、それで20万。」——他には？——「他には別ない。」

3つの説明の仕方の出現数を学年別に示してをると、表2のようになった。

2年生では、23人(79パーセント)が自然的説明を行っている。4年生では、28人(74パーセント)が自然的、9人(24パーセント)が混合的説明である。6年生になると、自然的説明は11人(33パーセント)になり、混合的説明13人(39パーセント)、社会的説明9人(27パーセント)となる。

なお、値段の違いに対する説明にはいる前に、子どもはそれぞれの製品に値段をつけているが、

その学年別の平均価格は表3の通りである。

表2. ボールペンと腕時計とテレビ

	社会的	混合的	自然的	その他
2年	1 (3)	2 (7)	23 (79)	3 (10)
4年	1 (3)	9 (24)	28 (74)	
6年	9 (27)	13 (39)	11 (33)	

人  
(パーセント)

表3. 子どものつけた価格

	ボールペン	腕時計	テレビ
2年	330	2,700	18,000
4年	130	12,000	160,000
6年	140	8,500	81,000

円  
注 テレビを500万円とした4年生1人を除く

### 3. 去年のスイカと今年のスイカ

形も大きさも同じスイカが年によって値段が異なるのはなぜだろうか。この問に対する説明は4種類に分かれる。

#### ①自然的説明

Y. R. (F) 8. 06

次に、去年はスイカが1個800円でした。今年は、おんなじスイカが400円です。どうして今年は去年より、値段が安いんだと思う？——「去年の方がおいしかったから。」——おいしさがおんなじだったら、どんな（どうですか）？——「古かったりしたから。」——もし、おんなじぐらい新しかったら、どんな？——「去年の方が、おっきかったから。」

T. T. (M) 8. 02

去年はスイカが1個800円だったんだけど、今年は同じスイカが400円でした。どうして今年は去年より値段が安いんだと思いますか？——「今年が安いんでしょう？」——うん。——「・・・去年はあんまり暑くなかったけん、高くした。今年は暑かったけん、400円で安くした。」——暑かったから？——「うん。」——暑かったら何で？——「おいしいけん、安くしたほうが人が買うでしょう、800円より。だけえ（だから）。」——暑かったらおいしいのか？——「うん。」——暑かったらおいしいから、おいしいのは安くする？——「うん。」

#### ②混合的説明

H. N. (M) 10. 06

去年はスイカが1個800円でした。今年は同じスイカが400円です。どうして今年は去年より、値段が安いんだと思いますか？——「えーと、いっぱいあったから、それで高くすると、なんか、買ってもらえないとか、そういうので低くしたとか、それで他には、あんましょく、あれ、実がおいしくないとか、そういうので、『高いな。』とかそういうのを言われたくないから低くしたとか、そういうので、値段を安くしたんだと思います。」

I. T. (F) 10. 03

去年は、1個スイカがね、800円だったんだけど、今年は、スイカが1個400円になってたんだけど、同じスイカが。それは、何で今年の方が去年より、安くなってるのかなあ？——「それはスイカのできる量が違って、その400円のときは、スイカがたくさんできたから、なんかすごく安くなりして、で、800円っていうのは、スイカが少ないと、なんかそれだけ、同じ値段にしておくと、

それだけなんかあの、得じゃあないから、だからいろいろと、大きさは同じかもしれないけど、なんか作った年の量とか重さとかで、決めるんだと思います。」

### ③社会的説明

S. M. (M) 12. 07

去年はスイカが1個800円でした。今年はね、同じ大きさ、重さのが、1個400円だったんだって。どうして今年は去年より、安いんだろう？——「えっと、作るときの機械とかが・・・えっと・・・機械が去年より性能がよくなってきてるから、それだけ去年より生産が作りやすくなるから、安くなったんだと思います。」

M. T. (M) 12. 04

スイカがね、去年は1個800円だったんだって。それと同じようなスイカが、今年は1個400円だった。どうして去年より今年の方が、安いのかな？——「去年はたぶん100個ぐらいしかとれんで、800円で、今年は1000個ぐらい作れて、400円ぐらいじゃないかと思ったし、とか、作った場所がもし違ったとして、例えば400円は今年は鳥取で作ったとか、で、他は北海道とかアメリカとかで輸入したとかって、で、値段が違うんじゃないかと思った。」——他に？——「他にない。」——どうしてね、たくさんとれると安くなるのかな？——「たくさんとれると？やっぱ、たとえば、もし安い場合だったら、今年は400円で、去年はあんまりとれんのに400円で売ってたら、なんか損になるし、損になるから800円値段をつけて、ちょっとでもたくさんもうけようとして。」——あー、そうか。——「うん。」——他には？——「他にない。」

### ④主観的説明

J. Y. (F) 8. 06

去年はスイカが1個800円でした。今年は同じスイカが400円です。どうして今年は去年より、値段が安いと思いますか？——「それは、安い方が大安売りできるし、いっぱいある方が。」——今年の方が？——「うん。」——他には？——「わかりません。」

M. N. (F) 8. 04

去年はスイカが1個800円だったんだって。今年は同じスイカがね、1個400円なんだって。どうしてね、今年の方が去年より値段が安いんだと思いますか？・・・——「800円のスイカなあ、あまり売れなくて、400円にしてみようかって400円にしてみたらよく売れたから。」

表4. 去年のスイカと今年のスイカ

	社会的	混合的	自然的	主観的	その他
2年	2 (7)	2 (7)	11 (38)	7 (24)	7 (24)
4年	13 (34)	7 (18)	13 (34)	5 (13)	
6年	22 (67)	6 (18)	4 (12)		1 (3)

(パーセント)<sup>人</sup>

ここで言う主観的説明とは、「価格の変化を主観的な事柄(安売り, 損得など)によって説明しようとするもの」である。これを、今までにみられた自然的, 混合的, 社会的説明に加えて学年ごとの人数を示してみると, 表4のようになる。2年生では, 自然的説明が11人(40パーセント), 主観的説明が7人(24パーセント)であるが, 混合的説明や社会的説明も2人ずつ現れている。4年生では, 自然的説明が13人(34パーセント), 主観的説明が5人(13パーセント)に対して, 混合的説明が7人(18パーセント), 社会的説明が13人(34パーセント)となっている。さらに, 6年生になると, 主観的説明がなくなり自然的説明も4人のみで, 混合的説明6人(18パーセント), 社会的説

明22人 (67パーセント) となる。

## B. 銀行と利子

まず、銀行に行ったことがあるかどうかの質問に対する答えを学年別に整理してみる。表5は、その結果を示したものである。(事情により、質問一回答の無い場合があり、人数が若干少なくなっている。)

表5. 銀行に行ったことがあるか

	あ る	な い	わからない
2 年	19 (70)	8 (30)	
4 年	27 (77)	6 (17)	2 (6)
6 年	23 (82)	5 (18)	

人  
(パーセント)

表6. 銀行の機能

	貸付け	保 管	その他	わからない
2 年		16 (64)	4 (16)	5 (20)
4 年	2 (6)	33 (94)		
6 年	8 (30)	18 (67)		1 (4)

人  
(パーセント)

この地域では2年生でも19人 (70パーセント) の者が銀行に行ったことがあると答えている。4年生では27人 (77パーセント)、6年生では23人 (82パーセント) が銀行に行ったことがあると言う。

銀行の機能に関しては、子どもはどう考えるのであろうか、子どもの答えは、「保管」だけを指摘したものが多かったが、「貸付け」まで言及した者もあった。表6は、子どもの答えを学年ごとに分類して示したものである。

2年生では、「保管」が16人 (64パーセント)、「わからない」とする者が5人 (20パーセント) である。4年生では、「保管」が33人 (94パーセント) にのぼり、「貸付」まで指摘した者が2人現れる。6年生では、「保管」が18人 (67パーセント)、「貸付」まで言及した者8人 (30パーセント) となる。

預けたお金はどうなると考えられるだろうか。子どもの答えを、「増える(利子がつく)」「変わらない」「減る」に分類して学年別に示したのが、表7である。

表7. 預けたお金はどうなるか

	利 子	不 変	減 る	わからない
2 年	6 (33)	7 (39)	2 (11)	3 (17)
4 年	23 (66)	10 (29)	1 (3)	1 (3)
6 年	25 (89)	2 (7)	1 (4)	

人  
(パーセント)

表8. 利子がつく理由

	社会的	主観的	事実的	わからない
2 年		1 (17)	1 (17)	4 (67)
4 年	4 (17)	7 (30)	3 (13)	9 (39)
6 年	6 (24)	7 (28)	2 (8)	10 (40)

人  
(パーセント)

預けたお金が増える(利子がつく)ことを知っている者は、2年生で6人 (33パーセント)、4年生で23人 (65パーセント)、6年生で25人 (89パーセント) であった。

次に「増える(利子がつく)」と言った者に対して、その理由を聞いてみると、その答えは主として3種類に分かれる。第1は、事実的反復で、「お金をいっぱい預けると利子がつく」など事実を繰り返すだけのものである。第2は、主観的説明で、お礼や「したいから」など主観的なものによって説明しようとしているものである。第3は、社会的説明で、銀行の行う貸付業務やお金を造ることなど社会的な事柄に言及しているものである。そうした分類結果を学年別に示したのが表8である。

各学年共に「わからない」とするものが、多数を占めている。社会的説明は、4年生で4人(17パーセント)、6年生で6人(24パーセント)だけである。

## 考 察

### 1. 価格の比較課題にみる児童の社会認識の困難

バナナとスイカの値段の違いの説明の結果(表1)から示されるように、社会的説明を行うものは、2年生0パーセント、4年生5パーセント、6年生24パーセントである。混合的説明を加えても2年生3パーセント、4年生29パーセント、6年生48パーセントである。つまり、価格の社会的説明がなかなか現れにくいこと、いつまでも自然的説明にしがみついている子どもが多いことがわかる。

スイカはバナナより大きい。スイカはバナナより高い。だから、スイカはバナナより大きいから高い。これは、小学生にしばしば見られる推論である。たまたま同時に存在しているかもしれないものの属性をもって必然性の認識に代えてしまうところがあるのがその特徴である。この現象は、ピアジェによって観察されたものと同様なので、転導推理と呼ばれている。ピアジェは、子どもの物理的因果の説明においてこれを観察しているが、本研究により社会的現象でも同様なことが示されたことになる。ただし、物理的因果の認識においては、具体的操作の獲得(7, 8歳ころ)によって転導推理は克服され因果関係の理解へと進むわけだが、価格の理解においては、8歳あるいは10歳でも転導推理はなかなか克服されない。子どもは、「大きい」だけでは矛盾をきたすことに気づくと(大きくても安いものがある)、今度は「おいしい」ことを理由にあげ、それでもうまく行かなくなる別の属性を見つけようとする。

物理的因果は、ものともとの関係に目を向けたとき発見されるが、社会認識はものともとの関係の背後にある社会的関係を捉えない限り進まない。そこに、社会認識独特の難しきがあるのではないだろうか。さらに、ものともとの関係はそれを操作する活動を通して認識されるように、社会的関係も社会的活動を通して認識されざるをえない。たんにものを見ているだけでは認識には至らないように、買物の様子を見ているだけでは、社会認識にはいたらない。相応の社会的活動が社会認識に求められるのである。しかし、後者は、子どもの前に手軽には用意されていない。こうしたことが、自然認識に比べて社会認識が遅れやすいし、場合によってはかなり年長になっても認識が進まない根拠となっているのかもしれない。

### 2. 農産物と工業製品

農産物がどちらかというと自然的であるのに対して、工業製品は人工的であることがわかりやすい。つまり、労働過程に目が行きやすいのではないか。したがって、社会的説明も現れやすいのではないか。そう考えることも可能であったが、結果はそれを支持していない。工業製品では、混合的説明も含めて社会的関係に言及した者は、2年生10%、4年生27%、6年生66%であった。ごく

わずかに自然的説明が減り、混合的ないし社会的説明が増えているが、農産物の場合とほとんど差はない。

スイカが高い理由においては、「大きい」とか「おいしい」とかのことがあげられたが、今度は、時計あるいはテレビの方が「便利だ」とか「役に立つ」ということが持ち出されている。これは、価格が経済学でいうところの使用価値によって説明されていることになる。たしかに使用価値の存在は必要条件であって、これ無しにはものには価値がないし価格も現れない。しかし、使用価値はそれぞれのもので皆異なる質をもっているわけであり、それぞれのものが一様に金額で表示される根拠とはなりえない。「労働」の発見が近代経済学を成立させたように、子どもの社会認識においても「労働」が発見がなくてはならない。しかし、子どもは普段には消費者の立場だけに立たされており、生産の側からものを見る機会には与えられていない。ものを買うという実践（個人的実践）はできても、価格を認識するという社会的行為にはなかなか到達しない。

表9. 比較の仕方の違い

	バナナ スイカ	去 年 今 年
2年 (29人)	1 (3)	4 (14)
4年 (38人)	11 (29)	20 (53)
6年 (33人)	16 (48)	28 (85)

人（パーセント）

子どもにとっては、たんに目の前に与えられるだけでは、農産物を通して社会が見えにくいように、工業製品を通して社会は見えにくい。社会は自発的には発見されにくい。

### 3. 「同じものの比較」における葛藤と進歩

農産物における比較であっても、「バナナとスイカ」のように異なったものの比較と「去年のスイカと今年のスイカ」のように同じものの比較とでは、子どもの説明の仕方は違ってくるであろうか。次の表9は、それぞれの場合社会的言及（社会的説明+混合的説明）を行った者の人数を学年別に示したものである。

社会的言及をした人数は、「去年と今年」の比較の方がどの学年でも増加している。各学年別の割合をみると、2年生が3パーセントから14パーセントへ、4年生が29パーセントから53パーセントへ、6年生が48パーセントから85パーセントへ変化している。小学生全体としては、28人（28パーセント）から52（52パーセント）へ増えたことになる。

「去年と今年」の比較では、自然物としては全く同じスイカが比較の対象となる。したがって、価格の違いの根拠をスイカそれ自体の属性に求めようとしてもうまくいかなくなる。もちろん、「本当は少し味が違っていたんだ」のように言い張ることもできるが、それは質問者から否定される。子どもは、葛藤が起こりやすい状況に追い込まれることになる。質問される中で、はじめは自然的説明に頼っていた子どもも最後に矛盾を感じとっていったのではないだろうか。

別の角度から言えば、社会認識が発生するためにはいったん自然的関係が捨象される必要があったのではないか。社会認識の発達が進んだ子どもの場合は、「バナナとスイカ」の比較においても自発的に自然的関係を捨象して社会的関係を表象しえたのであろう。しかし、同じスイカの比較という課題の性質によって自然的関係を捨象しえた子どももかなりいたのではないだろうか。

### 4. 利子と社会制度

銀行に行ったことがあると答えた者は、7割から8割である。預けたお金に利子がつくことを指摘した者は、2年生で6人（33パーセント）、4年生で23人（66パーセント）、6年生で25人（89パーセント）である。しかし、そのうち利子の出所を社会的に説明した者は、2年生で0人、4年生で4人、6年生で6人と少数であった。これは、銀行の機能のうち「保管」だけなら指摘できる子どもが2年生16人（64パーセント）、4年生で33人（64パーセント）、6年生で18人（67パーセント）

いるのに対し、「貸付け」まで指摘できる子どもは、2年生で0人、4年生で2人、6年生で8人と少数であったことと対応している。

銀行は、商業地域の子どもにとってはよく目に触れ、話にも聞き、また行ったこともあるところである。しかし、銀行は企業体であり、社会制度であって、直接経験した範囲のことを越えて「社会」を表象できなければ認識も始まらない。それが、こうした結果に現れていると考えられる。この結果は、「バナナとスイカ」の質問において社会的説明をした子どもが少数であったこととときわめて類似している。ともに、社会的表象を自発的に行うことの困難を示している。

### 注

(1)お金の支払いに関する実際の問題については次のような研究がある。

Struss, A. L., 1954, The development of conception of rules in children, Child Development, 25, 193-208.

Berti, A. E. and Bombi, A. S., 1981, The development of the concept of money and its value : a longitudinal study, Child Development, 52, 1179-1182.

(2)社会認識に関して一連の研究を行ってきたのは、ファースである。その全体は、次の本にまとめられている。

Furth, G. H., 1989, The world of grown-ups. 加藤泰彦・北川歳昭(訳)ピアジェ理論と子どもの世界 北大路書房 1987

(3)場面に拘束された思考については、次の論文参照。

田丸敏高 1987 対話事例にみる児童の社会認識の発達 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 29-1 55-71ページ

(4)社会的関係と個人的関係との区別の困難性については、次の論文参照。

田丸敏高 1988 子どもはどのようにして社会を認識し始めるか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 30-1 203-229ページ

(5)利子の理由の無理解については、質問紙調査による学会発表がある。

高橋恵子・波多野誼余夫 1987 小中学生の「金融制度」についての理解 教心29回 学芸大

(6)本論文では、1987年度文部省特定研究(鳥取大学教育学部、代表後藤誠也)において、高取憲一郎氏と共同で集めた資料の一部を基に執筆した。なお、特定研究全体の報告は、次の文献でされている。

『山陰における発達保障をめざす教育と地域福祉のあり方に関する研究』 1988 鳥取大学教育学部  
また、本論文の一部は、以下の学会で発表した。

田丸敏高 1988 子どもの社会認識の発達 教心30回 鳴門教育大

(7)女兒で年齢は8歳6ヵ月であることを示す。なお、以下、(M)は男児を示す。

(平成元年4月20日受理)